

夢か現のアジール公演

西松 布咏

三月十一日午後二時四十五分。
京都「アジール公演」で唄う稽古を終え、三陸沖の地震
速報をテレビ画面で観ながら遅い昼食をとっていた。その
時、突然画面が揺れ大きく横揺れが始まった。とつさに
テーブルの下に隠れ、頭上で激しくものが壊れる恐怖に慄
きながら、私はいったいどこへ避難したら良いのだろう。
と途方にくれていた。

アジールとは耳慣れぬ言葉だがASYLUMの略語で、
隠れ家や避難所を意味する英語である。あれから二週間後、
私は京都に旅立った。まさに毎日揺れる東京から避難する
ように「アジール公演」のために...

京都の空気は真冬のように冷たかったが、穏やかな高
瀬川沿いの木屋町にひっそりと佇む畑旅館の座敷に通さ
れた時は、よつやく安穩の地にたどり着いたような気持ち
であった。

いよいよ初音館でのデモンストレーション公演を夜に控
えた二十五日の朝、私は座敷の雪見障子を明け放ち、鴨川
のゆつたりとした流れを見ながら三味線を弾いた。

苦界に身を任せながらも憂き世に流されまいと必死で生
きてゆく遊女の唄「嘘とまことの二瀬川 騙されぬ気でた
まされて」をつぶやきながら一瞬にしてすべてを奪って
しまったあの津波の画面を思い出した。

岡倉天心が瞑想した茨城の五浦海岸に建つ六角堂が跡形
もなく消えてしまったことも...十数年前にその座敷で親し
い友人達と大海原を眺めながら句作に興じたことも今では
遠い幻の夢となってしまった。

眼前の鴨川は朝日を浴びてきらきらと輝き、悠久の時を

ゆつたりと経て何事もなかったかのように流れている。ど
うぞこの景色はいつまでも変わりませぬように...祈
る思いで唄い続けた。

京都を離れる日、雷の固い桜が震えている八坂神社で手
を合わせ、円山公園を散策し、柔らかな日差しに誘われて
ねねの道、石塀小路へと足の向くまま歩き続けた。そろそ
ろ...どこにいてもこのかわからなくなった時、摩利支天・
禅居庵と書かれた境内が突然眼前に飛び込んで来た。

今回の公演に唄ったケネス・レクスロス作詞「摩利支天
の唄」の神様がここにも奉られている!と思わず興奮した。
夜毎あなたを夢見るので恋しい昼は夢なのです。と京都
に滞在した詩人ケネスは摩利支天という芸者に名を借りて
詠んだ。

摩利支天の語源はサンスクリット語で陽炎を意味し天災
地変の守護神で、やがては武士のお守りとなる七頭の猪に
座す開運と勝利の神になってゆく。かたやその語源はイン
ドの川の流れを意味し、水を守る神様でもあり琵琶湖の竹
生島や湘南の江ノ島に「妙音弁財天」として芸能の神とし
ても崇められている。

三月十一日を境に神々のおわします神話の国は、瞬時に
生活のすべてを破壊する天災に見舞われ、人智の遠く及ば
ない無常の国へと塗り替えられてしまった。

昔から先人はそれを畏敬していたからこそ神仏に祈り、
神への鎮魂を捧げるために歌舞音曲が生まれ、様々にかた
ちを変えて今日まで累々と持続してきたのだ。その伝統音
楽を未来へつなげたいと日々研鑽を積んでいたはずの自分
が、日本列島がいと儂く破壊してゆく様を呆然と見てい
ることしか出来なかった。

今まで私は何をしてきたのだろう。これから何が出来
るのだろう。

いまだに余震が続き、自問自答の落ち着かぬ日々には苛立
ち、いつそどこかへといった衝動に駆られることがあつ
たが、京都から戻った今、お弟子さんと共に白金台の稽
古場に正座できることがかけがえのない日常と思えるよ
うになった。

繊細な糸の響きに耳を澄ませ、先祖の望郷の声に耳を澄
ませ、今こそ日本の心に耳を澄ませ新たな日本の唄を高ら

かに紡いでゆこう。

かくも儂い国に生まれた縁に感謝し、山花草木の美しい
風土に育まれてきた音楽を命ある限り唄いつづけてゆこう。
京都での「アジール公演」は私の唄に対する覚悟を決め
る旅の始まりとなったような気がする。

選曲II編集

高橋 幸治

自分の仕事が編集II情報デザインということもあり、以
下の三つの事柄に関しては、いつもそれなりに注意を払っ
ている(つもり)。一、さまざまな情報の中からその時々の
環境に合わせてどんな情報を抽出するか? 二、抽出した



撮影 清水俊洋

情報をどんな順番で並べるか？ 三、その並び順を採用した場合、全体としてどんなメッセージが生成されるのか？

二十世紀初頭から中頃にかけて「戦艦水戸ヨムキン」などの名作を撮った旧ソ連の映画監督セルゲイ・エイゼンシュテインの「モンタージュ理論」は、まさにその、情報の並べ方、に関する編集の理論で、エイゼンシュテインの主張をく掻い摘んで言うと、シーンAの次にシーンBを繋げた場合、ABそれぞれの意味が止揚されCという上位の意味が発生する……というものである。

編集＝情報デザインにとつてことほどさように順番は大切で、内包している個々の情報は同じでも、その順番を変えれば印象、意味、さらには全体の内容までが変わってくる。で、ここからが本題。早いもので入門以来丸々四年が経ち、以降、師匠の演奏を何度も拝見させていただいたが、毎度毎度はつとせられるのは、舞台ごと異なる師匠の選曲の妙である。特に一曲目。何かこう、さりげなく、自然にかつ強引に、ふつと気持ちを持っていかれる。最初の曲というのは演奏が始まる直前までその場を覆っていた雰囲気やどう異化するかが問われるわけで、その空気をどこまで引き継ぐのか、またはどこから断ち切るのか、おそらく、最も重要な判断なのではないだろうか？

一月二十九日(土)、浅草・ことぶき亭で催された落語の春風亭正朝さん、地唄舞の吉村ゆかりさんとの共演「江戸夕凨」でも、やはり師匠の選曲は冴えていた。この日の会場はマンシヨンの一室を改造し(たぶん)舞台をしつらえたもので、それなりの風情はあるものの若干手狭。どこことなく気持ちが落ち着かない。そこに正朝さんの軽妙な司会が入り、いよいよ師匠の出番となった訳だが、「並木駒形花川戸 山谷堀からちよいと上がり」で始まる端唄「並木駒形」で、その場の空気が一気に落ち着きこころを得た。

小舟に乗って吉原へと向かう途上の地名を提示されることにより、観客は会のテーマとなる江戸を、そして遊里を想起する。続く小唄「辰巳よいとこ」では、直前に唄われた吉原若者の向こうを張った辰巳若者の出で立ちが唄われ、一曲目の地名の提示を継承しつつ、今度は遊里に暮らす私たちのイメージが徐々に立ち現れる……。

開演前まで諸処に浮遊していた客席の意識はこのとき既

にひとつの道筋を与えられ、いま目の前で紡ぎ出されつつある「江戸夕凨」の世界へとひとつの間に誘われていた。続く小唄「一日を」、小唄「お園」では、土地という具象からいよいよ恋心という抽象への連続した転換が行われ、「艶姿女舞衣」(お園はその主人公)＝人形浄瑠璃という連想から、浄瑠璃の流れを汲む新内の小唄「夢の柳橋」へ。ここで再び江戸の花街へと舞台がダイナミックに切り返される。そして今度は雪の中を女のもとに通う男心をテーマとした端唄「我がもの」、ラストは端唄から派生した情緒的かつ技巧的なスタイルの楽曲＝歌沢の「身はひとつ」で終演……。

具象と抽象、男と女、端唄／小唄／新内／歌沢といったスタイル、ありとあらゆる情報が縦糸・横糸として重層的に編集され、ひとつの立体的な時空間が構築されていく。普段の稽古では日々、唄と三味線の「間」と格闘しているわけだが、ひとつの曲の中だけでなく、演目と演目の境にも「間」は存在する。さらには舞台上上がる者からすれば観客の気分との距離感も重要な「間」と言えるだろう。そうした無数の「間」をどんな演目と曲順でデザインするのか？ 師匠の選曲には常に注目なのである。

粹な男になりたくて

石原 忠光

二月六日、金華山お城下の、鮎料理かわらや、で、江戸小唄の会を覗かせていただきました。「何でお前が江戸小唄なんだ？」ですよねえ……。

祭好きで神輿フリークのボクに十五年くらい前、松岡正剛さんが、「石原君、木遣唄もいけど小唄、いいですよお」「はあ？」「僕の友だちの西松布咏さんを紹介しませうね」で、着物姿の魔女と遭遇しちゃった！

あん時、感染してたんですね、きつと……。でも、若かったのか潜伏期間が長くて、すぐには発症しなかった。

その後、柳ヶ瀬のワインバーで、勝新太郎のCD聴いて、「なんかカッコイイなあ……」「いいでしょ、粹よねえ……」このママの一言、中年には殺し文句ですよ。

以前から、危ないなあと思ってた建築系の、それこそ嘘のかたまりに手足つけたような、刺々な先輩が小唄やってて、発表会に冷やかに行ってた程度だったのに。

それが、去年あたりから「最近、小唄習い始めたんやて」「石原君、西松さんって言う師匠知ってるか？」身辺には殺し文句にやられたゾンビがうろつ……。

件の先輩から電話で、「あのさー、宴会だけでもいいから出てこれん？」

とうとう粋艶会の唄い初めに呼び出されちゃったって訳。鬼が島へ行く桃太郎のつもりで帯に尺扇をぐつと挿し、かわらやの階段を上ると、障子から染み出るような三味線の音……。テンジャラスゾーン！

下手から、そおーと潜り込むと、六曲一双の前には芸ちゃん……。

あれ聞かしゃんせ ああ端唄 聞くにつけても思い出す……

普段とは違って神妙な顔。小唄端唄の背景には物語があった、その主人公になりきって唄うらしい。

鮎洲の海晏寺は紅葉の名所で、奈良や京都にも負けないって歌詞だけど、実は艶比べじゃないのかなあ……。

「色の品川 情けの鮎洲」ってくらいだし。どうもいけない、



すぐそつちに反れちゃうんですね。

座敷に上がるとすぐ羽織を脱ぎたがる凡夫には、紫の羽織の紐の結び目の：

こんな怖ろしいシニールな人生観には、ついてけませんよ。酔っ払って殴った殴られたなんて話じゃないですから。そもそも、布師匠の一寸さびのある声で朗々と唄われると、やたら艶っぽくなって、あぶない世界を覗いちゃうんです。縁でこそあれ、未かけて、約束かため、落ちついた

大事な男は、他所の花、女心に、口説かれて切るに、切られぬ、此系が、義理ゆえ細る、仇名草志ん生さんの唐茄子屋政談、思い出しちゃった。

野暮は揉まれて粹になるとか言いますが、花魁を知る由もない半可通の分際は揉まれなくっていいんです。

茶の湯というワクチンの助けを借りて、南瓜売りのゾンビにならないよう腐心している此の頃でございます。

唐茄子屋あー…



計画停電に思う

並木 隆史

平成二十三年度鳶くらぶ幕開け興行を西松布咏さんにお願いました。旧暦の正月に「正月を寿ぐ」というつもりで二月二日にしたのですが、よく調べたら今年の正月は二月三日、つまり二月二日は大晦日でした。しかしながらそ

こは布咏さん、晦日に因んだ曲を織り交ぜつつ「春風がそよよと、福は内へとこの宿へ、鬼は外へと梅が香添ゆる」と、時を節分へと移していただき、主宰者の失態を上手くフォローして下さいました。感謝。

このような書き出しで男女の心模様を書くはずでしたが、三月十一日の大災害で日本は国難に直面することになり拙文の趣旨を変更しました。

この災害は多方面にわたり大きな影響をもたらし、便利で贅沢な生活に慣れた今の日本人には当分不自由を感じるかもしれないが、それでも先の大戦での空襲や原爆投下を受けての敗戦時の状況を考えれば、まだまだ余裕のある生活です。日本人の底力を以ってすれば十年から二十年で十分復興できるのではないのでしょうか。しかしながら計画停電や余震のおおりでイベントや公演がほとんど中止になっているのは残念です。節電するなど工夫すればなんとかなるはずなのに。こんな時こそ活発に活動し、どんどんお金を回さないと経済が停滞します。人々の心が委縮するのも心配です。東電の電気供給量が減っても、駅構内、パチンコ屋、コンビニなど不必要に明るかったり、エアコン掛け過ぎの施設が多かったりするので、節電できる余裕は十分あります。劇場も夏はひざ掛けが必要なくらい冷やして休調を崩さないよう注意する程です。これからは節電のため、少しは快適な劇場になるものと逆に期待しています。薄着で団扇を持参し、その白扇を止めるような芸の力を見せてもらいましょう。伝統芸能は電気がない環境の中で育まれてきたのですから、本来の形で演じていただけの良い機会ではないでしょうか。

頑張って歌舞伎興行を続ける松竹は節電の一環で照明を落とすそうですが、「今までは明る過ぎてハレーションを起こすくらいだったので却って良い舞台になる」と岡崎制作部長。

能も暗い所では白い能面が引立ち、縫い箔もその効果が発揮されます。「明治時代中期に興福寺の薪能が復活された時、電燈一つ下げるとも憚られた」と能楽師の安田登さん（日本人の心と体を元気にする注目の異才）。この際、形式だけではない本物の薪能や蠟燭能を観たいですね。

神を喜ばし豊作を祈る芸能である相撲は街頭募金も結構

ですがむしる境内などで復興支援の勸進相撲をやってはどうでしょう。八百長騒ぎで世間を騒がせたお詫びもかねて「昔は屋外でやっていたので天候に左右されることを計算して一ヶ月の余裕を持って十日興行をやっていた」と元力士一ノ矢さん（お相撲さんの、腰割り、トレーニングに隠されたすごい秘密）実業之日本社でブレイク。



月明かりを愛で、蠟燭の揺らぎに身を浸し、布咏さんの三味線と唄に耳を傾ける。寒ければ火鉢に手をかざし、鉄瓶でお燗をして一杯やる。考えるだけでわくわくしませんか。当代の勘三郎が話していましたが、芸妓さんがお酌をするときにしなだれかかるようにするのは暗いので手元をよく見るためだそうです。妙齢なご婦人にお酌をしてもいい、何とも言えぬ香しさに胸をときめかす。節電に託けてこんな贅沢な時を過ごせないものかと。

皆さん、日本の素晴らしい伝統文化を楽しむ絶好の機会が到来しました。豊かな気持ちになつて少しずつ着実に国難を乗り切つて行くことではありませんか。

（平成二十三年三月二十七日、谷崎潤一郎「陰翳礼讃」を読み返しつつ）

日本人に見る「思ひやりと覚悟と」

軍司 達男

東日本大震災から一カ月近くたった四月九日。都内赤坂のお座敷を借りきつて行われた「美紗の会のことい」に客として出席させて頂きました。西松布咏さんとは、NHK時代からかれこれ二十年近くのお付き合いですが、門外漢

